

特20
341

中尾氏就譯

沿革
奇談
英
州
紙

明治十四年三月發兌

英脚紙自序

今ヤ文運隆盛知識開進ノ秋夙ニ米國ノ往事ヲ談シ夕ニ歐
洲ノ書ヲ讀ム往昔唐土古代ノ歴史ヲ以テ足レリトセシモ
今猶萬國ノ事情ニ通ゼザレハ飽ザルモノ、如シ故ニ近來
外國史ノ翻譯陸續出テ跡ヲ絶タズ是ニ於テ乎婦女童蒙ト
雖_ヒ亦以テ外國史ノ何物タルヲ知ラント欲シ遇譯書ニ就
テ探ルモ奈何セン文中漢語等字義ノ解シ難キヲ吾曹ノ常
ニ遺憾トスル處ナリ茲ニ洋書「コンベルセル」シヨン、チン、ゼ、
ヒストリー、チフ、イングラント」ト題セル冊子アリ緋キ閱ス
ルニ英國ノ學女「マーセット」姓ノ編纂ニ關リ該國ノ婦人其愛
女ト英史ニ就テ會話セル事跡ヲ講述セルモノニシテ其說
ク處極メテ親密ナレハ苟モ此書ヲ一讀スルヤ恰モ歴史ヲ

看ルカ如ク傍ラ童蒙教導ノ一助タルヲ證スルニ足レリ譯
シテ以テ英艸紙ト名ク固ヨリ小説ノ譯書ナルガ故ニ勤メ
テ了解シ易カラシ主トシ附スルニ平仮名ヲ以テ不讀者
幸ニ其文ノ拙劣ヲ咎ル勿レ

明治十四年三月

（以下は非常に淡く、ほとんど不可読な文字列が並んでいる）

例言

- 一本編直譯ニテハ我邦ノ人情ニ適セザル辭句アリ而シテ
 - 該書固ヨリ字義ヲ論スルモノニ非ザレバ譯者之ヲ拾捨
 - 増補シ以テ讀者ニ便ナラシム故ニ原書ニ對シ一字一勾
 - 照合ヲ施スルハ或ハ多少ノ差違ナキヲ保セズ
 - 一書中班雜ノ憂ナキヲ圖リ人名國名地名人種名物名注解
- 〔附言〕發言等ノ區畫ヲ用ユ

沿革 英艸紙初編目録

上 卷

一 第一章

英國往昔の土民「ブリットン」人種不開化の事
並に「ドリリュド」党の事

一 第二章

古代羅馬人の開化を評する事

一 第三章

羅馬人「ブリットン」の住地押領土民教育の事

一 第四章

通貨の便不便を論する事

一 第五章

「サクソン」党「ブリットン」掠奪の事

一 第六章

「サクソン」党開化の事
並に法律の理由を談する事

下 卷

一 第七章

「デンス」党攻撃の事
附「メルフレッド」王遺言の事

一 第八章

外國貿易の利害を論する事

一 第九章

「ダノスタ」品行の事
並に罰則の事

だから野蠻といふ理もなすが、
大船を小舟に載せ、住む島は山の
より他に何れか知らぬ島に
解らな意のたす娘に、
の様な寒さあつたといふ
も人を外か良長に、
御座りませぬ、
其籠を脱ぎ、
外様をまきまき、
かた様は、
うはに、
お其時、

だ、
取、
愛、
し、
こ、
者、
事、
只、
捕、
代、
無、
御、
五

夫で虚弱の病、其の元は、
夫を知るに、余程困苦の
者、其時代は、女が生れ
若くは、其時代の、生れ
着て、其時代の、生れ
夫を知るに、余程困苦の
者、其時代は、女が生れ
若くは、其時代の、生れ
着て、其時代の、生れ

と加を教たの、意と、
方を知るに、余程困苦の
者、其時代は、女が生れ
若くは、其時代の、生れ
着て、其時代の、生れ

此のれは眞實の天を知らず、只神靈の靈を以て、
 神女神が澤山あると思つて、種々の肖像を彫り、
 などとて大層信心をたたり、娘の如くおぼへ、
 居るに似合なものを、併し、
 ソへ入逐た時には、未だ「キリスト」の生れな
 前、
 此宗旨を信仰する者は、
 人の種々の人々を、
 艾たのたを、
 始て入り逐た時は、
 「子」を、
 の兎も角外は、
 致して遣れを、
 し、
 此のれは眞實の天を知らず、只神靈の靈を以て、
 神女神が澤山あると思つて、種々の肖像を彫り、
 などとて大層信心をたたり、娘の如くおぼへ、
 居るに似合なものを、併し、
 ソへ入逐た時には、未だ「キリスト」の生れな
 前、
 此宗旨を信仰する者は、
 人の種々の人々を、
 艾たのたを、
 始て入り逐た時は、
 「子」を、
 の兎も角外は、
 致して遣れを、
 し、

母として其時代に、
 國であつたが、
 いと思つて、
 一人の方、
 方には銃器が、
 代に、
 うで、
 も思は、
 へたのは、
 の歴史を、
 ものを、
 母として其時代に、
 國であつたが、
 いと思つて、
 一人の方、
 方には銃器が、
 代に、
 うで、
 も思は、
 へたのは、
 の歴史を、
 ものを、

「予」せ外の國では何も知らないのは「カ」ト「マ」人丈はそんなに
 物理を知て居たのでせう「チ」へ「母」六ヶ敷の事を「尋」た
 へまづ「カ」の歴史を讀んで「覽」極く古ひ國で昔から能く
 開けた土地だから「ブリ」ットンへ來た時にはなんでも知
 居た「知」れた「澤」田「知」は「こ」も「遠」方へ往く「と」も「出」
 も磁石と云ふものが「ない」から容易に遠方へ往く「と」も「出」
 來る亦板木もなければ紙もなかつた「リ」并「娘」それでは書籍
 もなく學校もなたせうな「母」「十」二書籍も随分あ
 たが其時代の「皆」エ「シ」ブで産る「ヒ」ラ「エ」云ふ木の葉
 に書たもの「娘」「ツ」レ「シ」ア御母さん紙の「と」を「ヒ」ア
 と云ふのは「の」べ「ヒ」ラ「エ」といふ木の「名」が「出」たの「ら」ま
 御座い「ま」ま「ま」なんだか能く似て居ま「ま」から「冊」眞實に「左」

様だ「ま」をじて後には「ハ」ア「チ」イ「メ」ン「ト」いふ「獸」の皮で製す
 た厚ひ「斐」天な紙が出来たがこれも至つて鮮ひもので一度
 書「お」なるのを亦削つて書くこともあつた位だからどうし
 て「お」書籍などは「ぞ」く「な」ひ「等」サ「娘」御母さん愛に奇麗な技術
 と云ふことが書てありま「ま」が「こ」れは「な」んの「と」も「御」座い
 ま「ま」が「冊」それは家屋堂宇劇場其他種々細工物を「ぞ」る「と」も
 古「代」は「サ」シ「ア」の「人」が「こ」れな「業」には「ま」手であつたが「中」
 築造ぐらゐなら「今」でも「ク」リ「ン」ズ「の」「英」國の「セ」ン「ト」ボ「コ」
 川「府」英國の大龍動「ま」だ他にも澤山ありま「ま」ねへ「冊」それでも「サ」
 シ「ヤ」の「人」や「サ」シ「ア」の「人」が「建」た様に奇麗には「い」り「な」い「ソ」サ
 今の様に物理を「明」て居る人で「ま」へ其眞似が出来「な」いか

どを作るために設けたものでそれまでの麵包を製するも麥
 が不自由であつたのら只獸肉をのりて他よなんよもなぬ
 ところへ色よくあものが出来る様よなつたものだからナリ
 ヲトンのためよの至極よぬナ娘「チヤそれでも小女など
 よの何日も父さんが捕ておぬでの鳩や山兔の肉が好
 で餘り喰飽たときの麵包や菜がなくて馬鈴薯さへあを
 必宜よ座いまそヨ母「チヤ前のさうおいひたが馬鈴薯
 の近來喰ふ様よなつたもので昔時なかつたのらナリヤ
 の人でさへ知らぬナナナをして此芋が始めてイタリヤへ渡
 った時よの皆草の根だといつて犬などよ喰たもので後
 よイタリヤの南部の手エアルスの王が毎日此芋を一皿ツ
 喰たので其時の人よして見ると王でさへ喰るものなら

我々が喰ても恥でないなぬと云つて喰て見ると美味ものだ
 のら竟よの食物よもるやうよなつたも漸く百年をのり前
 のことだヨ娘「チヤをさでの馬鈴薯の何國のら來たもので
 そのそんなよ永ひ問た知らぬでの無遠方よら來たもの
 で座いませうチ「母「をさのチヤのら來たもので其
 ア「のチヤといふ國の「クリストラル、コロムブス「人よじりヤ
 傳第四編「といふ人が距今三四百年前創めて發見した國だ
 ヲ娘「そしてナリツトンのローマ人が始めて林檎を持って來
 たまでよなよの果實が座いたしましたの母「あることよあッ
 たが云ひおらべると無おわらひだらうまづ其時代よの椽
 栗杏覆盆子山査子枳殼等にて宜いものよあつたナサ娘
 「チヤ不嗜を酸ひものよのりて其内よも覆盆子がまだそ

し雅味で其他のものいふなりを聞ても口中に酸水がたまる様でそ子へ母「そして實のならない木での柵檜秦皮等に
 して見まるとロリーマ人に國を描きたのの却つてガルツト
 の僥倖でそ子へいつまでも朦味で居るよ置い知らない
 ことを習ふて早く開化みなる方が餘程宜いと思ひまそワ
 母「然らヨ最初ロリーマ人が慘酷よあはしたのら天主が可愛
 そうなと思召てお救ひあされたもの併しまだ其時
 代よ随分苦められたこともあつたのだヨ」
 第四章
 娘「ロリーマ人が貨幣で賣買をすることを教あの前より面白
 取遣をして何でも貨幣で物を買あいで物と物とで交換を

きたのでそ子へ母「さうヨをきで誠に便利が悪かつたヨサ
 娘「チヤ何故でそ子へ其方が餘程便利がよいと思はまそ
 奈何あれむ若不用の靴があつて帽子がほしくをそと交換
 が出来まそが夫を貨幣でをきハヤツ前に其靴を賣まそ其
 貨幣で帽子を買あけをやからあいら一度に出来まそ
 を二度の手數がかかりまそ譯でそ子へ母「成程さう云へを
 尤のやうだがそこよ不便利あことがあるヨサ其譯が此大
 のキリネトマステイ(祭日蘇大)に御前の小遣を十シルリシグ
 十シルリ四拾錢に當る我をあげ替りに何の不用の品物で
 與るからと室内を見廻し爰に椅子が澤山あるのら此内を
 一脚あげると如何をしだ娘「少イ少女の椅子あどは不用せ
 んのら市場へ持て參ッて木偶や籠細工の様あ好あものと

交換をいたしましたら十シリングで買ったよりのモソツトよいものと換ふことが出来ませうチへ母「此椅子の新調どきの餘程高價ものだ。今でいそこし損じて居るヨソ」て市場へ往よの如何して持ておいでだ。蕪弄の車よの乗せられかひし馬車も同乗て往の嫌だらうチへ娘「ナニトマズ（八）に頼んで蕪弄店まで届て貰ひ少女の跡のらば母さんと兩人車に乗りよいものを見がでら市場へ往き蕪弄店で椅子が来て居るの尋て何物と換て呉さまその聞く積て座いまも母「ソコヲねた」が蕪弄賣の主人あらコウ返答をそるヨ折角のこととでそがドウモ此椅子の餘り細工がよそぎて丈夫にありません。のら直ぐ小兒が毀してしまひまを夫に私方の椅子どの格好も違ひあんだの端物の様で仕方

が座いません。のら換ふことは出来ません。此時「ヒイ」は笑ひあがら娘「チヤマア母さんは意地の悪い蕪弄賣さんでそチへ母「をさでもさう云へば仕方ないヨ併しモウ少しおまけにして。是より母は眞面にあり蕪弄賣の身振をさし仮聲を遣ひそれじや若し他にこんを椅子を求ないと云ふ。地方があるかも知れません。からね急であくを預り申まそから御面倒でも次の市日みれいで下さいまし尙「ソヒイ」戲談交りに娘「夫さ母さんそさでねまけでとか少女に何かよい物を令直に持て歸たら座いまも母「夫でも次の市日迄に椅子の賣人を待てからのことサ。此時母は「ソヒイ」の少し不平の色あるを察し笑あがら「ソコヲ椅子の望人が出来たが其人が肉屋だ。のら肉より他よの換るものが

ちいと去て牛の前足は羊の頭よりどちらかよりも好む方が
 代よおげまそと云ふのだがどうだへ娘「チヤ代に肉で御
 座いまそが肉などの何程でも御母さん下さるお好ま
 せんをきじや肉屋さんと交換の廢まいたしませら母「をき
 でいまだ外は髪を捨てる人が御前のやうな椅子と探して
 居るので適度ほまへまよい格好な髪もあるが是は牛の足
 や羊の頭よりの餘程高價ものだヨ娘「チヤ嫌でせる子へ少
 女の地髪が澤山で何程よい髪でもいませんあらまじ此
 椅子を御返しして十シリリシク貨幣で下さいま直まなん
 でも好なものが出來まそを十で其内四シリリシクで木偶
 を買で亦四シリリシクで色く木偶の衣服もある様ももの
 を求めて参ッ宅で稽古のため縫裁をせたら樂もありま

だ立シリリシク殘りまそを御菓子を買て部屋で
 炊事をえて遊びまそが椅子での貨幣のやうに分けてつ
 ぶことが出來ません子へ母「をきでも椅子の足が四ッあ
 るからハラ〜崩そと幾もあるヨ娘「そんな破損たも
 のをもつて終日市場を哭歩行ても誰か換ての與ません
 ヨ母「ソレ御覽をきだから物と物との交換をせるよりの貨
 幣を持て賣買をせる方が餘程便利がよいチヤ

第五章

第六章句を讀終りて娘「十日火が漸々ナリットンに深切
 に物理を教へる様になると自分の國に戦争が起り歸て居る
 留主へサクソン「中古の祖なり英國「覺が來てブリットンを分
 捕して慘酷にあはしたうへ可愛そらに小兒迄も擒とえた

とは悪いサクソンです。母としてサクソンのブリットンによりもまだ文盲であつたからローマ人が攻めて来た時の様に物理を教たると云ふこともないのだからいけなひ。サ娘それじや却てブリットンの方でローマ人に習たことなどをサクソンへ教たでせう。母「ナニそきは互に親睦ひときのこととで喧嘩の最中にもものを教るなどは出来るものじやないヨそれだからローマ人も喧嘩をして居る時にはブリットンの家を焼たけ自分の食料でない穀物は踏倒し亂暴して後ち漸く平和なつてから家屋を建てることや庭園を作ることなどを教たのだヨ娘それから野菜果物蓄蔵などを栽培する様になつたのです。母「さうだヨそして夫からローマ人も木像などを信仰することを廣し耶蘇宗

になつた時には矢張ブリットンにも其法を教へ學校を建て小兒に造經文を教授た。サ娘「母さんモウこれから戦争などはない様にしたいもので。母「眞實にそうだが娘「そきに何故澤山兵隊あどを召集たのでせう。兵隊がなければ戦争がなくてよいと思ひます。母「そきでも外國から攻撃で来た時は兵隊がなくてはならぬのでいやでも自分の國が大切と思へば戦争もあけりやならぬ。サ娘「ブリットンも兵隊があつた。ローマやサクソンも國を捕まえることもなかつたのだが併しブリットンの様な盲人者でも數年ローマ人の勝あどが出来なかつたのもブリットンが國や妻子のためを思つて苦戦をしたからだ。サ娘「そきやブリットンが兵隊を組織たのも全くローマ人

又教へて貰ったのでそ子へ母然う言ふかじロイヤル人が今
 リットンは軍法を教へ居ると適度自分の國に戦争があつた
 からブリットンの強ひ兵隊を連れて往つた跡へサックスン党が
 攻めて来てそを拒に兵隊があつたサ娘「ロイヤル人も
 深切に似合あし得手勝手でそ子へ母「そをだから一旦國を
 捕まへ他の支配を受ける様にあるをどうしてもよい事ばかり
 はあつてもそのサとしてブリットンでもロイヤル人に種々教を
 受て居るもの、眞の獨立を云ふものであつて是迄自分等
 がたてゝおいた掟を守るまどが出来あつてもロイヤルの
 法則を守らなければならぬやあつたから親睦ひ時でも愛
 憎があつたり奴隷と云ふ程あつたサ娘「そをさやサックス
 ンで敵々などのことを往つたサ娘「そをさやサックス

ちががらつたのでそ子へ母然う言ふかじロイヤル人が今
 直にサックスンで敵々などのことを往つたサ娘「そをさやサックス
 の淋や森の中で鳥獸を合住せしめ居る所を學校迄も敵討に
 母「此時サックスンで敵々などのことを往つたサ娘「そをさやサックス
 像など信仰させられ終つて居る所を學校迄も敵討に
 母「此時サックスンで敵々などのことを往つたサ娘「そをさやサックス
 處は居りまよか母「其子孫が續て居るのだよそをさやサックス
 丸しが去年の夏サックスンで敵々などのことを往つたサ娘「そをさやサックス

議定たのいたなヒサツツンでも其人が違ふて押領した時
 代のサツツンよりいまだ餘程賢ひ人達だヨ娘眞實にそん
 な善ことを議決た人達の大層賢ひものでモ子へ凡そ物に
 制規のさいほどいけなれものい座いませんヨ無法國と
 云ふ書籍にもそんな譯が載てありましたがサツツンおど
 の自分勝手流儀で居ながら制規などを拵べたどの實に
 感心でモ子へそして物に制規があるど勝手なことが出来
 ません母憲法といふの勝手なことをや惡事をしてしなれ
 設けたもので無法國を讀でも國に憲法なく物に事規はな
 らどきは百事勝手次第は様なれども却て憲法又の制規は
 あるどきより不自由なことが載てあるから只惡事と少し
 もしない様にして善事なら何程しても構はないと云ふ主

意だヨ娘それは惡心れある者でなけりや誰でも惡事を
 えてよいど云ふ者は座いません母なんでも憲法と云ふ
 は惡事と云ふ様に設てあるもれだから善者も惡者も皆
 守らなけりやならないが中には善者に不便利なことがあ
 るヨ既にイタリヤ國には人氣は暴ひ處があつて喧嘩をそ
 るど直又刃傷を始る惡弊があるから刃物さへなければ自
 然人氣も靜謐ななりまた害を被る者も少ないと云ふので
 刃物を持って歩行ことを今でも禁止であるが中には穩當な
 人もあつて刃物を持って歩行ける誠便利のよいことがあ
 ると思つても出来まいから其人の爲に便利が惡と云ふ
 ソサ娘併しそんなことを不足に云へません若し云ふ人
 がありましたら成程御前さんの自分で疵を附かす了簡で

も若他人が其刃物で疵を附たら如何なるのだと云てやり
 まむワをして御母さんサクソンが悪漢を捕へて罪の有無
 を能く糾問したと云ふの誠に宜いよと御座います手へ
 萬一罪のあぬのに罰を受ける様あると大變で何か
 ら母眞實にさうだよそして法則を犯した者の是非罰を受
 かけりやからあぬもので何程法則を定ても其法則に附た
 罰則と云ふものがあけりや何にもあらずサ娘「若かり
 其罰則を拵るにも知らずに犯則する者があつてのなりま
 せんから此法則を犯せよと云ふれ」の罰があるよと云ふこと
 を豫て告知して置ねをなりませんよ母「然うだよをして
 罰と云ふもの何のために設たものだと思ひが娘「それ
 の悪心事を去た者に夫だけの困苦をさせるので御座いま

せう母「サニ悪者があれを宜時分に天主が戒めなさるから
 依令悪事を去たよと云ても人を苦てよと云ふことひ決
 てなぬ咎夫だから悪者を苦ませる爲に設であるよれでは
 ないヨ娘「それでは解まえた一度法則を犯しても二度と犯
 さなぬ様に去たよれで少女でも何かあぬ事と去て罰と
 受たら二度と去なぬ様に心得ませから盗賊でも同じこと
 で貨幣を盗んで一度罰を受ると牢屋の苦去ひことなどを
 思つてよサ再び盗まぬ様になると云ふ譯では座いませ
 う母「マアそんなもので悪者にそれだけの返報をさるので
 らなく其ことを二度と去なぬ様に去たものサ娘「それに宜
 ことに二度も悪事をしなぬ者でも罰を懼れて終にぬそ
 んことをしなぬ様になりませう若し貧乏人が牛の肉を

見て傍に人が居ないと不圖盗心を生し數日肉の味を忘れ
 て居る女房や子供に喰せたいと思つても能く考て見ると
 若亡發露たら永く牢へ關るか流罪になつて可愛ひ妻子に
 別れて働くことも出來ないからこんな浮雲とは止め
 じやうと云ふ様になつて苦めないで戒になることも後座
 いませう母實にさうだヨ夫だから到底罰は田野の案山子
 の様なものだ其案山子の前で盗む者があるから困る
 其娘鳥でも案山子の前へ來るとがありがたそが其時には百
 姓が鉄砲でうちまそから中には其鉄砲に當つて死ぬもの
 も座いませう母を以て盜賊が捕縛と牢屋へ入れられて
 から判事と拾二名の檢事の前で糾問を受いよ〜犯罪が
 あるといふことが定ると夫から罰を受るのだヨ娘を以て

の少女もどうぞ上院どう云ふ所へ參つて憲法を成定る商
 議役になりたぬものでそ子へ母「それでも御前の内に厄介
 が澤山あるう亦田舎に居なけりや田畑を支配する者が
 なぬときなど往のが嫌よおなまだヨ娘「ナニ貨幣を澤山
 もつて商賣などしなぬでも宜と云ふ時參たぬと申そ
 ので御座いますヨ母「婦人を上院などの議官よめること
 なぬうら決して往きなぬヨそして女子と云ふもの何程
 金満家でも嫁入をしなぬ前よ御母さんの手助をして嫁
 入をそを其家の諸事注意て小供を能く教育なけりや
 ならぬもので法則などを議定るのどうしても婦人より
 の男子の方が餘程上手だヨ

奇談 英脚紙 初編上巻畢

海の盜賊でそ子へ母眞實よ海賊と云ふハサをいして分捕船
 があひどきの海濱へ上陸が亂暴をむむと云ふはあつてい
 グラントの東の海濱へ來るといふ其時の王が兵隊を出して
 追拂ふことを云ふが母で其儘穩當に引退らば若干の貨幣を
 遣うと云ふたの娘を「や戦争をむむは餘程よ御
 座いませんと暫時考へてがじ貨幣が欲むおまど来たがも
 知をません子へ母眞實よ御前のふいびの通り是れが党ん
 軍もじおひで貨幣を貰たものたがらご作のよ心得意が出
 來たと思つて亦直に引返し來ると其時の王が旗憶病者で
 亦幾許の貨幣を遣て後ら數度來るとはなが竟は子外ル
 川(是は)云ふ義なり渡ると云ふ税金を賦課ることになつたが
 餘り度々のことの後には渡とことが出來なくなり據なく

軍を始めをから何代り戦つて漸く「ソルラレツト」王の時
 代に始て追拂つたの娘を「そを」は其時は「エルラレツト」
 と云ふ名高ひ王が山をたつた何様な騷まなるかもし途
 せえんそを此「ソルラレツト」王が幼年の頃或る婆
 えの宅で菓子を焦して叱られた嘲があつたが國王にな
 ったとを聞たら無其婆を驚かしたら「母
 伊あたしの話をおきよ其「ソルラレツト」王は頗る豪傑老
 また文學に達し皆よ教るべ好であつたか其時代の
 者ましでは最初「ソルラレツト」戦争をした時の難儀の替り
 王が出て種々宜とがあつたのだよ云かもし此王が強な
 たら「ソルラレツト」を追拂ふことも出來た學文を教授る
 とも出來なハサをいして「ソルラレツト」の再び來なハサ
 防禦

の軍艦を製造したのだから娘は心か
 實は英國人兵が意に如く自由を
 守るにば耳の座に母の遺言が
 智の聞かある國王は其の遺言
 何様な事でも勝手な耳に聞か
 も悪思案も出るもので其惡事
 にはなから思はれる娘を女遇
 ので貪漢が牛の肉を盗まふと思
 簡て是が永いあいだ可愛ひ妻
 卒未は陰謀せたいと思ひてそ
 程で御座りませぬ惡いことよ
 違ひありから王の

王の遺言は盜賊に
 盜賊に殺されし
 宜也申さるに御座りませぬ
 娘は王子の御座りませぬ
 軍艦の防禦の軍艦を前
 度惡い程罰を當るよ
 少餘程宜い程罰を當るよ
 艦を設けた戦争の夫が爲
 奪取した戦争の夫が爲

娘浪が損じ傷に云ふまじもあまさせんから海軍の方
 がまゝ御座いませが暴風波をがめる軍艦でも顛覆
 するに御座いませり手
 那あつて却て浪が人を殺す様なに御座いませり
 母海軍に毎度そんな事もあるが戦争の海でも陸
 軍に
 供なでの賑を悲歎して居るが思ふに人の跡に殘
 り涙を浮べた娘御母は元々海軍や戦争の事は
 聞てアゼルラウ王が外國へ遣つたのは商船の
 断致
 ませり其商ひものと云へば何で座いますか母
 何と云
 此處の好なるもの交易をい既深の夜白娘は此
 へ往つた事と不用の物を賣つた用物の物を買つた
 事と

母市場の云はれに交表はああるの非はな
 何處で購買する勝手の宜い場所は皆市場だか
 世界を指差せば大なる市場と云ふは世
 界中が市場で話して居るは外なる如きも
 開けた處は皆市場の様な外國に多いのは我
 國へ輸入
 互に交易をすれば双方便利になるが娘は
 王合はなれませり人益を得れば必一人が損
 る等々少女が相成り上(人)體牌遊を考へる
 少女が勝つ
 母市場が損致すは母商法と云ふものは中
 な譯とは違つたもので儼は前には靴が不足
 ないのに「お」が三股張持を靴が不足と云
 ば適

ので第に羅紗を製するを知らず
少女が「本國」の王女が外國の
呼んで昔は「羅紗」を製する
漸く少し開化は去るもまだ羅紗
が其の機械なども容易に出來た
のを外國に遣う他の品物も交易
るに外國に住む方がない
「三」は外國に住む方がない
だか入費は容易に掘り出す
の血をなす製造は容易に掘り
能く賣る川を娘「お」で座
錫でなればなりお座の持て
錫でなればなりお座の持て

澤山あつて喧嘩が出來た
喧嘩あつて喧嘩が出來た
で賣捌は「五」は「六」は「七」
代金を絹羅紗葡萄酒などを賣
品を買はせしむるは「お」の
用物を其儘に去るは「お」の
居る貧窮人が澤山あつた
ておらねばならない筈
外國から物を買ひの宜い
のしかたは「お」の宜い
のしかたは「お」の宜い

不安く出来るものなれば遠方へ買ひ往く馬鹿の無い海は
 買入る品物のいづれも此處で製造するより安いものなれば
 例を密柑の随分此國より出来なれば過すなれば其の温室を
 設へ冬は猶更暖氣よもて培養を能ふ心得た者を雇ひ附き
 置ねるなら港はうして密柑が出来たところが入費が澤山
 の、つて夫是を密柑の密柑が出来るまで五
 割(我)壹圓(貳拾)も安く出来れば僅の壹分
 買入る際國の来たる密柑程より美味が少い
 由壹個宛喰のを止て一度は四分の程に於て
 度位は喰ひ喰ひ勘定に於て今迄も密柑は自然な
 ふ様な人味も知なくなつて密柑賣場自然な
 う、夫だ、外國で安く住入て来る人も買ひ取
 なる譯

で密柑類は次第に宜いので外國から仕入て来るもの
 が澤山あるが娘は解さぬ少女がはかどあし
 を致さぬが何に思ふまゝの當て御覽なさいませぬ
 が解らないヨ娘今の御喉を庭園に響へ其庭園の中央へ御
 母さんが青ひ垣をなす少女とウオウ上(童)さんとは
 分て下りつたとして彼兒の所には桃の木が有り少女の所
 には梅の木が有り雨方と喰飽た後其桃の實と梅の實
 を交易をなしたか遠方へ御座いますやん船なを
 送るとおぼやめて互に垣を投げ越してウオウ上(童)さん
 女の梅六個の替りに桃壹個呉を桃六個より大々つて味が
 宜みらるるで下度至當と云つて又其後はおかなは様は
 て椎の實と櫻の實を交易いたさすたが外國と交易を

るのもてなな譯で御座いませう。母「それな様なものをだが御前たちの貨幣なしに交易をしたのだが昔時
 交易の様は娘「それにて椎の實と櫻の實と交易する時に
 多ひ少ひの喧嘩が出来て双方立腹をひてから交易
 は廢め少女は充分椎の實を喰ひ残ったのは皆捨ました
 「オトル馬」さん其櫻の實を捨るは惜と云て皆喰ひ
 まひたら直ぐ腹が痛くなりました。母「それや、兩
 方に罰が當つたのだ。おまの國と國と喧嘩をひると直に
 戦争を始め是迄親しく交易をえて居たものが互に双方の
 妨害になること計りをとるのだが、困るんは、
 第九章

娘「母さん、シヨウ（僧侶の）「オトル馬」さんといふ人は随分
 悪人で、手少少は、シヨウ（僧侶の）を務る位だから尋常の者よりは品
 ひましたり、母「宗教を司る位の人だから尋常の者よりは品
 行がよくおけりや、なない筈で此職任のある人は大概皆
 名高ひ慈心有徳のある人でなければや、勤まらな
 亦悪い了簡も出るもの、見よ、其「オトル馬」は僧侶の監督
 だから其官位のため自然と慢心を生じ、威を張り權を振ひ
 なるでも自分の思ふ通りにならなと腹を立てるなどな
 が、竟に品行を紊基になつたもので、シヨウ（僧侶の）を勤る程の
 人でも、短氣なことで、凡俗にも劣る。娘「それを
 童子の様で、適度「オトル馬」さん「オトル馬」さんとおな
 だと思ひます。彼の姉さん賢いだけあつて常に遊戯を

去るにも皆彼の姉さんが指揮して他の者が好でも嫌でも
 自分の思ふ通にして若し何とか云ふ者があると直に此が
 女をら他の子達が悪い「ハアリ」さんだと云つて皆悪
 んで居ますヨ「母」凡そ人の性質と云ふもの男で女でも
 亦小供でもおなじもので彼の「ハアリ」の様な氣質の小
 供の間に矯正ないと成長て悪人になるヨ「母」人の耐
 忍がなければ出世の出来あいのので自分の身が修らあ
 のに他人の指揮の出来あいののだヨ「娘」素か七彼の「ハ
 イ」さん皆が賢い見なと云つて居りまはるら直々善
 おなりあも知れません「母」「ハアリ」さん少しも自
 分の悪いことに心附き只我身よ賢い者めないと思つて
 國王を困窘ることあつて考へた「ハアリ」さん「ハアリ」さん

が國王を退けて跡ハ「ハアリ」を立た時能く自分が國王に
 ならあかつたので「母」「ハアリ」さん「ハアリ」さんの
 任で英國の王位に即と云ふ様なことの出來あいの「ハ
 ヤ」「ハアリ」さんが「ハアリ」さんが戦争を考へた「ハ
 エル」少女の好む昔の「ハアリ」さんの子孫を考へる「ハ
 エル」王と軍を考へる「ハアリ」さん「ハアリ」さん「ハ
 王」が「ハアリ」さん「ハアリ」さん「ハアリ」さん「ハ
 を澤山貢に取るとになつたの如何に「ハアリ」さん「ハ
 が「母」それは其時代に「ハアリ」さん「ハアリ」さん「ハ
 無量の狼が居たので「ハアリ」さん「ハアリ」さん「ハ
 當時「ハアリ」さんが「ハアリ」さん「ハアリ」さん「ハ
 の英國の首府「ハアリ」さんが「ハアリ」さん「ハアリ」さん
 ひ甚しきは婦人童幼などを捕ひ殺す夫が爲に害を受るも

のが多^{おほ}い^{おほ}の^{おほ}ら^{おほ}「^{おほ}」王^{おほ}の考^{おほ}には毎^{おほ}年^{おほ}々^{おほ}或^{おほ}は^{おほ}み^{おほ}

 っ^{おほ}「^{おほ}」命^{おほ}七^{おほ}夥^{おほ}多^{おほ}の^{おほ}狼^{おほ}を^{おほ}殺^{おほ}さ^{おほ}せ^{おほ}れ^{おほ}て^{おほ}貢^{おほ}租^{おほ}は^{おほ}充^{おほ}る^{おほ}

 ぎ^{おほ}は^{おほ}自^{おほ}然^{おほ}被^{おほ}害^{おほ}な^{おほ}者^{おほ}も^{おほ}少^{おほ}く^{おほ}な^{おほ}る^{おほ}と^{おほ}云^{おほ}ふ^{おほ}了^{おほ}簡^{おほ}が^{おほ}ら^{おほ}始^{おほ}た^{おほ}こ^{おほ}

 其^{おほ}故^{おほ}か^{おほ}今^{おほ}で^{おほ}は^{おほ}狼^{おほ}を^{おほ}見^{おほ}た^{おほ}く^{おほ}つ^{おほ}て^{おほ}も^{おほ}居^{おほ}な^{おほ}い^{おほ}様^{おほ}に^{おほ}な^{おほ}つ^{おほ}た^{おほ}

 う^{おほ}じ^{おほ}て^{おほ}其^{おほ}「^{おほ}」王^{おほ}が^{おほ}今^{おほ}「^{おほ}」の^{おほ}考^{おほ}介^{おほ}には^{おほ}「^{おほ}」

 攻^{おほ}て^{おほ}來^{おほ}る^{おほ}間^{おほ}暇^{おほ}の^{おほ}な^{おほ}い^{おほ}様^{おほ}に^{おほ}な^{おほ}る^{おほ}だ^{おほ}ら^{おほ}う^{おほ}と^{おほ}云^{おほ}ふ^{おほ}想^{おほ}ひ^{おほ}附^{おほ}も^{おほ}あ^{おほ}つ^{おほ}

 た^{おほ}の^{おほ}で^{おほ}御^{おほ}座^{おほ}い^{おほ}ま^{おほ}せ^{おほ}う^{おほ}ま^{おほ}「^{おほ}」母^{おほ}な^{おほ}る^{おほ}は^{おほ}ど^{おほ}さ^{おほ}う^{おほ}か^{おほ}も^{おほ}知^{おほ}れ^{おほ}な^{おほ}い^{おほ}つ^{おほ}

 併^{おほ}し^{おほ}戰^{おほ}争^{おほ}を^{おほ}む^{おほ}て^{おほ}人^{おほ}を^{おほ}殺^{おほ}さ^{おほ}す^{おほ}は^{おほ}狼^{おほ}を^{おほ}殺^{おほ}さ^{おほ}す^{おほ}方^{おほ}が^{おほ}餘^{おほ}程^{おほ}宜^{おほ}い^{おほ}

 娘^{おほ}昔^{おほ}「^{おほ}」「^{おほ}」が^{おほ}始^{おほ}め^{おほ}て^{おほ}「^{おほ}」奥^{おほ}へ^{おほ}逃^{おほ}て^{おほ}往^{おほ}た^{おほ}

 と^{おほ}き^{おほ}に^{おほ}「^{おほ}」其^{おほ}狼^{おほ}に^{おほ}喰^{おほ}ひ^{おほ}殺^{おほ}さ^{おほ}れ^{おほ}ま^{おほ}せ^{おほ}た^{おほ}子^{おほ}へ^{おほ}「^{おほ}」中^{おほ}

 に^{おほ}は^{おほ}喰^{おほ}ひ^{おほ}殺^{おほ}さ^{おほ}れ^{おほ}た^{おほ}者^{おほ}も^{おほ}あ^{おほ}る^{おほ}だ^{おほ}ら^{おほ}「^{おほ}」女^{おほ}小^{おほ}供^{おほ}を^{おほ}か^{おほ}り^{おほ}で^{おほ}な

く^{おほ}男^{おほ}も^{おほ}大^{おほ}勢^{おほ}居^{おほ}た^{おほ}も^{おほ}の^{おほ}だ^{おほ}か^{おほ}ら^{おほ}隨^{おほ}分^{おほ}其^{おほ}防^{おほ}も^{おほ}出^{おほ}來^{おほ}た^{おほ}も^{おほ}の^{おほ}で^{おほ}夜^{おほ}は^{おほ}

 篝^{おほ}火^{おほ}を^{おほ}焚^{おほ}ば^{おほ}狼^{おほ}は^{おほ}天^{おほ}火^{おほ}で^{おほ}山^{おほ}が^{おほ}焼^{おほ}る^{おほ}時^{おほ}よ^{おほ}外^{おほ}は^{おほ}火^{おほ}を^{おほ}見^{おほ}た^{おほ}こ^{おほ}

 も^{おほ}あ^{おほ}く^{おほ}ま^{おほ}た^{おほ}其^{おほ}山^{おほ}焼^{おほ}の^{おほ}と^{おほ}き^{おほ}に^{おほ}は^{おほ}多^{おほ}少^{おほ}焼^{おほ}死^{おほ}て^{おほ}と^{おほ}が^{おほ}あ^{おほ}る^{おほ}か^{おほ}ら^{おほ}火^{おほ}

 に^{おほ}は^{おほ}大^{おほ}層^{おほ}怖^{おほ}る^{おほ}「^{おほ}」娘^{おほ}其^{おほ}時^{おほ}分^{おほ}に^{おほ}「^{おほ}」云^{おほ}ふ^{おほ}老^{おほ}年^{おほ}の^{おほ}女^{おほ}

 王^{おほ}は^{おほ}餘^{おほ}程^{おほ}惡^{おほ}人^{おほ}と^{おほ}見^{おほ}な^{おほ}ま^{おほ}と^{おほ}が^{おほ}と^{おほ}ん^{おほ}か^{おほ}人^{おほ}に^{おほ}と^{おほ}を^{おほ}罰^{おほ}が^{おほ}當^{おほ}れ^{おほ}ば^{おほ}宜^{おほ}

 と^{おほ}思^{おほ}ひ^{おほ}ま^{おほ}そ^{おほ}「^{おほ}」母^{おほ}「^{おほ}」亦^{おほ}御^{おほ}忘^{おほ}れ^{おほ}が^{おほ}仮^{おほ}令^{おほ}惡^{おほ}事^{おほ}が^{おほ}お^{おほ}つ^{おほ}て^{おほ}其^{おほ}人^{おほ}に^{おほ}

 罰^{おほ}が^{おほ}當^{おほ}つ^{おほ}て^{おほ}外^{おほ}の^{おほ}者^{おほ}の^{おほ}戒^{おほ}め^{おほ}に^{おほ}あ^{おほ}る^{おほ}と^{おほ}云^{おほ}つ^{おほ}て^{おほ}も^{おほ}決^{おほ}て^{おほ}人^{おほ}の^{おほ}苦^{おほ}

 一^{おほ}む^{おほ}の^{おほ}を^{おほ}よ^{おほ}い^{おほ}氣^{おほ}味^{おほ}だ^{おほ}あ^{おほ}ど^{おほ}「^{おほ}」云^{おほ}ふ^{おほ}も^{おほ}の^{おほ}で^{おほ}い^{おほ}惡^{おほ}事^{おほ}を^{おほ}お^{おほ}

 た^{おほ}者^{おほ}の^{おほ}夫^{おほ}の^{おほ}罰^{おほ}則^{おほ}と^{おほ}云^{おほ}ふ^{おほ}も^{おほ}の^{おほ}が^{おほ}あ^{おほ}つ^{おほ}て^{おほ}罪^{おほ}の^{おほ}輕^{おほ}重^{おほ}に^{おほ}依^{おほ}り^{おほ}相^{おほ}

 當^{おほ}の^{おほ}罰^{おほ}を^{おほ}受^{おほ}け^{おほ}其^{おほ}者^{おほ}も^{おほ}亦^{おほ}外^{おほ}の^{おほ}者^{おほ}も^{おほ}再^{おほ}び^{おほ}そ^{おほ}ん^{おほ}か^{おほ}事^{おほ}を^{おほ}し^{おほ}な^{おほ}い^{おほ}様^{おほ}

 に^{おほ}そ^{おほ}る^{おほ}迄^{おほ}の^{おほ}よ^{おほ}と^{おほ}で^{おほ}其^{おほ}罰^{おほ}の^{おほ}言^{おほ}渡^{おほ}を^{おほ}そ^{おほ}る^{おほ}官^{おほ}員^{おほ}で^{おほ}も^{おほ}其^{おほ}者^{おほ}と^{おほ}憎^{おほ}ん^{おほ}

 で^{おほ}仕^{おほ}返^{おほ}を^{おほ}そ^{おほ}る^{おほ}了^{おほ}簡^{おほ}の^{おほ}な^{おほ}く^{おほ}只^{おほ}戒^{おほ}の^{おほ}た^{おほ}め^{おほ}ま^{おほ}そ^{おほ}る^{おほ}こ^{おほ}と^{おほ}で^{おほ}則^{おほ}ち^{おほ}其^{おほ}

罪を憎んで其人を憎まざると云ふの此事は夫だか何處
 の裁判官の死刑の言渡とて神病も罹たると云ふ
 あり其惡事をとる者の心の底までも見通して御座る天主
 が戒をささるから教文よの假令警敵でも見通せよとある
 娘「惡事をとる者よ罰を當るの其者もまた他の者も
 戒もあると云譯の能く了解したるが警敵でも見通せと云
 教の少趣意が違ふと思ひまはせしめて既にお罰を受けた盜
 賊でも其罰の如何云ふ理由で設てあると云ふことを考へ
 さい者も御座いますと母を色に前の解き様がお
 さいからさうおひだり例を愛ま貨幣の入色である
 布を盗まれ其盜賊を見附直ま捕らて法衙にお訴へ
 ていよ其盜賊が罰を受けらる場合にお訴へる間は受

返しを煮て宜い氣味だと云ふ様おもひの教文お懐と云ふ
 ので少しも憎と云ふことはお賢お可愛そうな譯だ
 後又再び惡ことをとるためにお罰を受けさるのだと云
 ふ者も其の慈愛の人情と云ふものな未だ女房罰を附
 にも只其者の思ひ様で能くなりまた惡くもあな譯せ娘
 るほど左様で座いますかモウ決して忘れは致しません
 が去が七彼の「エルフリズ」女王の惡事を讀まると眞實
 に黙許して居られさい様にありませから母「惡事を聞て腹を
 立てるのは人情だから尤だが教文も假令腹を立てても罪
 なることをとるあまた腹を立て惡人よで仕返をとる下
 で罰を受させ愉快だなど云ふ様お心さへ出さなけりや
 腹を立てるのも構おいとあるヨ

娘「デノス党は可愛そらよ」
 計り居るのでござんが情しい者は座いませんが亦腹が
 立まそヨ母「ソレは覽後よはハズシカ可愛くおがら
 う初めに嫌ひたと云たことを覺へておるでが娘「それでも
 其時代よは悪事のおつたので腹が立まそ母「其時の
 ソノ党とはおるじ血統でも人が違ひ前お母さんがお
 ひの通漸々開化して来たのでござん母「其善くある迄の間
 よ種々おことがおつて大層年數が経ておるまづ最初
 ソノ党がチリツキを分捕しな時がらオノ党の「カ
 ウト」がインカラソレの王位も即く逸而何程年間がある
 お思ひだヨ娘「どうも分りません母「凡そ陳百五十年位

の經てあるヨ娘「サヤア永ひ間でござん少女を元來
 過ては居ないと思つて居ませたをせよ「女」が善い國
 玉になつた時は變みサソソノ党が好になつた時よ餘程
 早くデノス党が好まなりましたヨモウ此後靜謐にして退
 を開化よ進む様になればよ座いません此後靜謐にして退
 此時代にはアラカ人の外にも澤山奴隸になつたもの
 座いません少女は奴隸と云ば黒種人だけかと思ひませ
 たヨ母「今で社そんなにもないが昔時は随分澤山おつた者
 で「トヤ人の攻て来た時にはアリソレを澤山奴隸に
 して亦サソノ党の攻て来た時に必擄ました者を皆奴隸
 ましたから其代りおサカソレも矢張サソノ党は爲奴隸
 されたのだが今ではソツリカ人れ外お奴隸と云ふ者お

娘が其アフリカ人だと云ても黒から野蠻だの奴隷だのと
 云ふ譯はあつたで何を云ふにも才智がなく只文盲で事理
 が明解あつたから無理あつたことでも開化した人の自由になつ
 て居るアフリカか如何して黒種人を連れて來るの
 で座いまま子へ母別にアフリカへ黒種人を買出しに往
 と云ふ譯はないが此國から商品を積んでアフリカへ賣りに往
 と云ふ其替には何を受取と思ひだす此時ソヒイは慄然と
 して言なければ其替りの品と云へば人間で男もあれば女
 も小供もあつて適度羊や牛の様に賣買をするのだヨ娘殺
 されるのでは座いませんアフリカに賣買をするのだヨ娘殺
 が奴隷に使れるのだから死ぬよりも苛酷な事があるアフリ
 娘アフリカを開化の人でもそんな悪い商法をするので御座

いませう母實にいやなことか今でも奴隷を使役する國が
 澤山あるが此英國での餘程以前から人身の賣買を禁じて
 あるから能く娘そんな悪業をそる者には厳し罰があれ
 心よぶ御座いまよ子へ母夫だから上院でも痛く其事を
 商議してアフリカで人民を賣買することを堅く禁じた
 ころがまだ夫でもイスペインだのポルトガルなどは密
 買をそる者があるから終に皆解放になつて今では黒種人
 でも此國では自由に働かすのが出來るのでヨ娘アフリカで
 もそんな工合にませせんのでせう母それでも中には至當
 の賃錢を出して職人を雇ふよりは奴隷を買つて使役する方が
 徳用だと思ふ國もあるアフリカに奴隷になると賃錢は遣ない
 のでせう母賃錢は遣ないでも元買た代金の外に食料と衣

服を造なけり。働かざりしが出来なから其入費が則ち賃
 錢に當るのだ。目をして奴隷を使ふは通常の人は違つて數
 年昔ひ使ひ方をとる。此國で解放されて或矢張働か
 ないで老賃錢を呉れり賃錢を貰はなけりや喰ふとが出
 來ません。母黒種人は解放されながら以前奴隷と
 なつて牛や馬の様に長ひ鞭で打擲れた時と同じ様に働か
 から奴隷を使ふのは第一罪なことで却て徳用にはならな
 い。其夫よりは能く氣を附て自由に働かす方がよいと能く
 理が早く外の國でも解れ必宜外に其娘如何しても外の國
 では黒種人を使はなけりやあつたのですか。英國で
 は職工農事其外何でも通常の人で充分で御座います。ま
 へ母アフリカの奴隷を使ふの多く西印度の地方と傍の地

圖を指してソレ御覽此邊の歐羅巴よりアフリカの方へ餘
 程近く時候も極めて炎熱ひ土地だから歐羅巴の人などの直
 に病氣が發つて中々辛抱が出来ないがアフリカの人民は
 自分の國で馴れて暑ひことなどは頓着せむ能く働くから
 黒種人を使ふも随分理由のあいことでもないが奴隷扱ひを
 玄ないで相當の賃錢を遣自由に働かす様にすれを能い
 母娘「玄か七御母さんアフリカ人を使つて自由に働かして
 置たら人間が愚鈍で百事氣が附あいから矢張奴隷にして
 使ふ方がよいと」
 「是れは頭部の格好が違つて尋常の人とは生得少しは愚鈍かも
 知れないが夫れでも矢張一種の人類でいつ迄も無智文盲
 といふこともない筈だからそれは此方から親切に教て遣

るのが至當で馬鹿がから奴隷にしと宜と云理は決し
 ないヨをして外の國で必黒種人よ劣つた尊惠の者
 も夥多あるが若輩智恵がから生や羊の様な賣買を
 て遣と云たら嘸其者が腹を立るであらう其併し
 程退屈をたすたぶるか講讀御仕舞に毛老波た明
 ことにはませるさふ人さ前々自由
 本心は淋常の貧乏を避る由の
 願人さ遊衣野山のさるさるさるさるさるさるさる
 自安のさるさるさるさるさるさるさるさるさるさる
 月夜はさるさるさるさるさるさるさるさるさるさる
 道はさるさるさるさるさるさるさるさるさるさる
 國はさるさるさるさるさるさるさるさるさるさる

譯者云フ初編ハ英國發昔ノ事情等ニ關シ其說シ處茫
 乎トシテ或ハ翫味少シト言ンカ然レモ順次編ヲ重ヌ
 ルニ迫ンデ漸々開化進步ノ事跡ニ涉リ珍說奇談太々
 多シ就中其第二編ノ如キハ人類ノ萬物ニ長タルノ理
 由ヲ論スルニ始リ田舎ノ民間ニ出テ終ニ王宮ノ高官
 ニ昇ル「ゴッドウイソ」畧傳其他稗益鮮カラザル論句ヲ載
 セ上梓ノ期近キニアレバ乞フ書肆ニ就テ愛觀アラソ
 一ナ

沿革 英州紙下卷畢
 奇談

明治十四年二月廿四日御届

翻譯兼出版人

大阪府平民

中尾氏就

東京淺草東町
六番地寄留

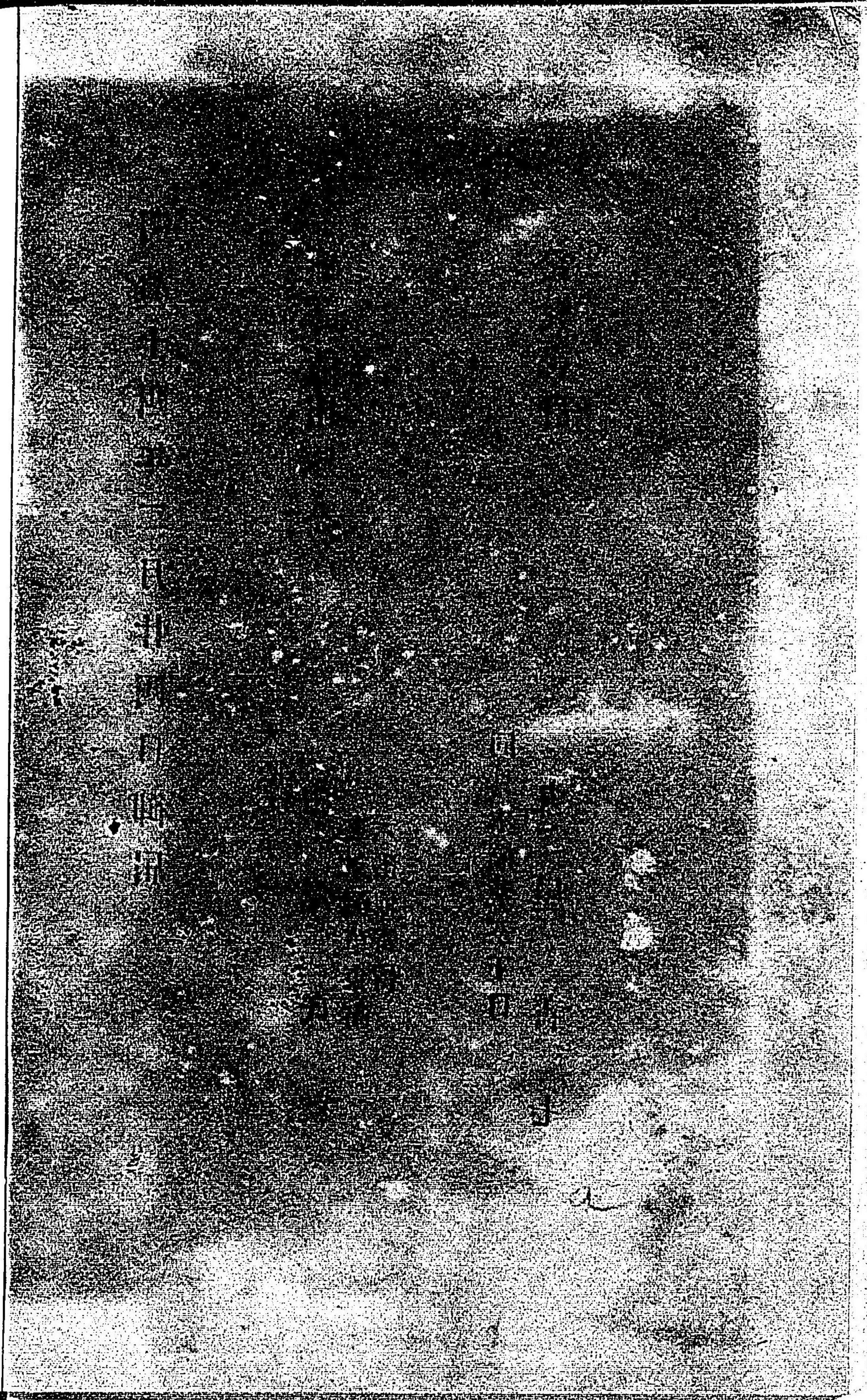
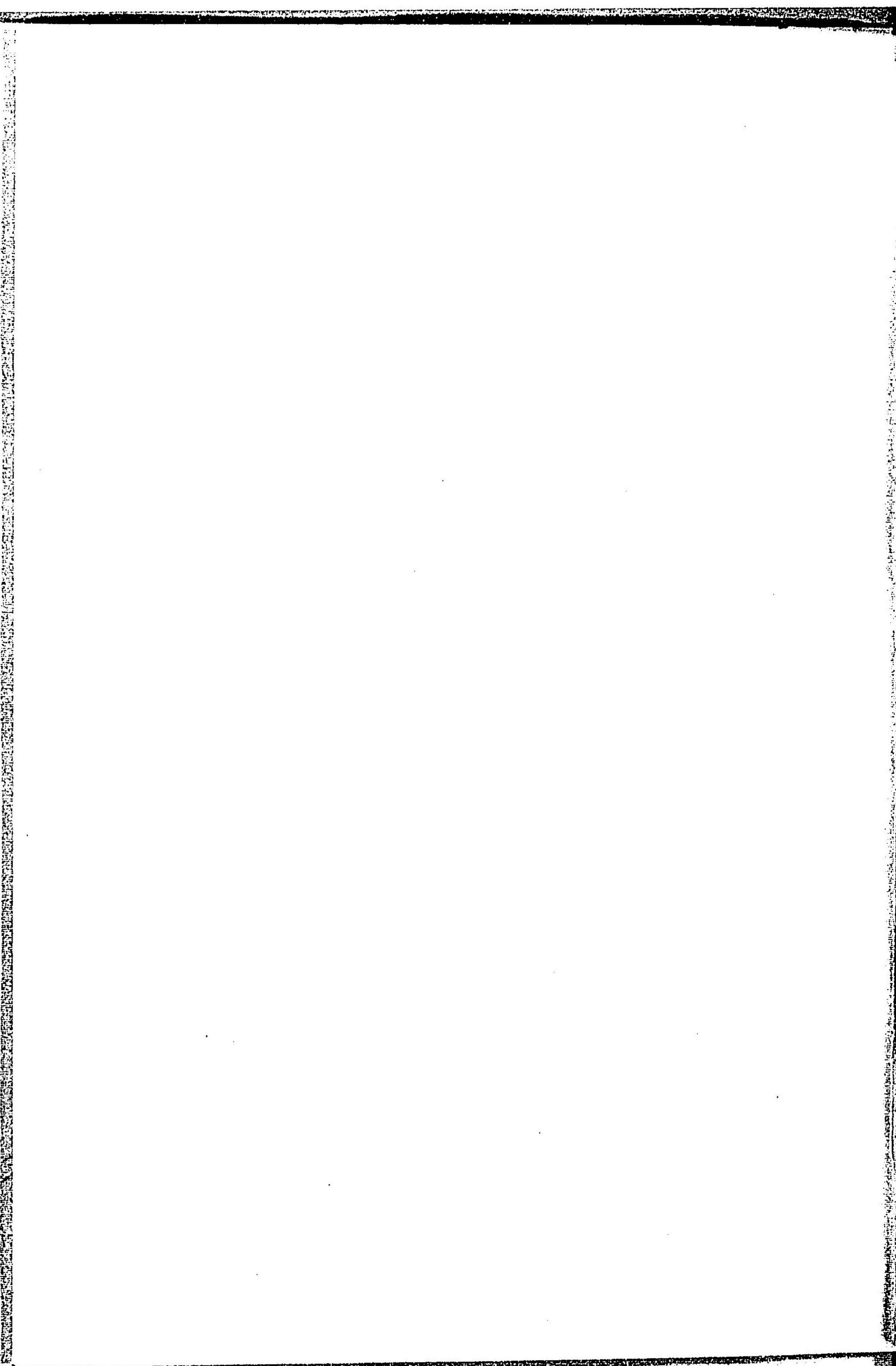
發兌書肆

同日本橋通三丁目

丸屋善七

10 定價廿五錢

（Faint vertical text, likely bleed-through or a secondary page of text, mostly illegible due to fading and low contrast. Some characters like '中尾氏就' are visible in reverse.)



Vertical text on the left edge of the dark area, possibly a page number or label.

特20

341

沿革
奇談 英草紙

国立国会図書館

101297-000-8

特20-341

英草紙

マーセット/著

M14

DBY-0628

